

### 『メメント』

2000年/アメリカ/クリストファー・ノーラン監督作品

### 「時間」を操る希代の 天才ヒットメーカーを輩出した出世作

会員 岡 佳佑 (71期)



発売元：博報堂 DY ミュ  
ージック&ピクチャーズ  
販売元：アミューズソフト  
価格：3,800円＋税  
©2000 I REMEMBER  
PRODUCTIONS, LLC

「好きな映画監督は？」と聞かれれば、クリストファー・ノーランと即答する。今年9月18日には全世界待望の最新作『TENET テネット』が日本でも公開された。「時間の逆行」をほぼCGなしで描いたこの最新作は、その革新的な映像表現と緻密に練り上げられた秀逸な脚本で全世界の度肝を抜いた。

ノーラン監督といえば切っても切り離せないのが「時間」。デビュー作『フォロウイング』から最新作に至るまであらゆる「時間」を描いてきた。人の見る夢を多重階層化し、各階層で流れる時間の速さを変えた『インセプション』や、一般相対性理論による時間のズレを正面から描いた『インターステラー』など。そんなノーラン監督を一躍有名にしたのが、全米で2000年に公開された『メメント』。

この作品では、妻を殺した犯人への復讐を誓う主人公レナード（ガイ・ピアース）が犯人捜しに奔走する様子が描かれる。レナードの家に浸入した犯人は、レナードの妻を殺害するとともに、犯行を目撃したレナードの頭を殴りつけて気絶させ、その隙に逃走する。目覚めたレナードに待っていたのは、殴られた後遺症で事故以降の記憶を10分程度しかとどめられなくなった自分の存在と妻の死という無慈悲な現実。

レナードにとっては、今起きていることは分かるのに前に何が起きたのかは分からない。この作品では、記憶をとどめられなくなったレナードの混乱を観客に追体験させるために、時系列が意図的に組み替えられている。具体的には「ラスト→冒頭→ラストの少し前→冒頭の少し後→……→中間」という順序で物語が進んでいく。

つまりこの作品は、レナードの犯人捜しの結末から始まる。結末から描いて中間にオチを持ってくる。これがこの作品に特有の「時間」の描き方である。

モノクロで描かれる順行パートとカラーで描かれる逆行パートが目まぐるしくスイッチするこの作品。置いてきぼりを食らわないように頭の中で整理しながら観なければならぬので、相当頭を使う。その代わり、最後まで食らいつくことができれば、ラスト（時系列としてはちょうど中間）で明かされる衝撃の真実と「時間」を切り貼りすることでレナードの混乱を巧みに描く編集の妙に唸られること請け合いだ。

昨今のノーラン監督作品はどれも製作費が1億ドルを超えている。しかし、デビュー作『フォロウイング』で発現して次作『メメント』で完成された彼の作家性、すなわち「時間」という概念に対する挑戦的で野心的な制作姿勢は今も全く変わらない。破格の制作費が投じられる以上、それを回収できるだけの娯楽性（広く受け入れられるような作風）を備えるよう圧力がかかるところだが、彼は例外だ。大手配給会社から巨額の投資を受け映画制作を任されてなお自身の作家性を余すことなく発揮し続けられる稀有な監督。そんな彼の存在を世に知らしめた出世作『メメント』。この衝撃、ぜひ皆さんも味わってみてはいかがだろうか。

ちなみに、パッケージ版では時系列順に並べ直した「リバース・シークエンス」バージョンが収録されている。必ず二度三度と鑑賞したくなる作品だが、物語の全容をよりクリアに描き出すこのバージョンもぜひ観ていただきたい。